「日々の理科・田中」（029）　2014 (H26),-7,16

「寝待月」

太陽の見かけの位置は、前日同時刻に比べて、ほとんど変化はありません。つまり同じ時刻に天球上のほぼ同じ位置に見えるということです。（正確には、赤経基準で１日につき約１度移動しています。）それに比べて、月の見かけ上の動きはずっと大きく、恒星や太陽に対して、視角度で１日に約 15 度遅れてゆきます。つまり月のほうが、見かけの日周運動が少しゆっくりなのです。太陽よりも月のほうが天球上の動きがゆっくりなことを実感できるのは、日食の時です。日食が起きると、太陽は必ず月の背後を「追い越して」いきます。

もう一つ、月の動きが少しずつ遅れていることを感じられるのは、満月を過ぎたあとの「月の出」でしょう。そのことは「月の呼び名」にも表れています。日本古来の月の呼び名には風雅なものが多いですが、満月のあとの月には、ズラリと名前がついています。

・満月（特に十五夜）の翌日＝十六夜（いざよい）・・・見た目にはほとんど満月です。
・満月の２日後の月＝立待月（たちまちづき）・・・立って待っていれば昇ってくる月。
・満月の３日後の月＝居待月（いまちづき）・・・少し遅いので、座って待てば昇ってくる月。
・満月の４日後の月＝寝待月（ねまちづき）・・・かなり遅いので、昇るのを寝て待つような月。

これらの名称からも、満月を過ぎた「月の出」は少しずつ遅れていることがわかります。その遅れは一日約５０分です。その５０分が日々累積して、一ヵ月で２４時間---つまり「周回遅れ」になって、もとの位置に戻るわけです。

４年生と月の学習をしている時に、「寝待月」の観察を宿題にしたことがあります。今考えればひどい宿題でした。何しろ寝待月が昇ってくるのは、夜中の１０時前後です。それでも子どもたちは実に真面目に月を観察してきました。（苦情もきませんでした。）

【子どものノートから】
「きのうの居待月は、天気が悪くて見えませんでした。だから今日の寝待月は絶対に見たかったです。１０時ごろと思っていたけど、なかなか見えませんでした。１０時半ぐらいに、真っ赤な夕日みたいな月が見えました。それが寝待月でした。寝ないで見れました（見られました）。」
「ぼくは寝待月を、寝て待とうと思ったのですが、月が気になってぜんぜん寝れません（寝られません）でした。けっきょく、寝ないで月を待ちました。オレンジ色の、ネコの目みたいな月がのぼってきて、感動しました。月は少しずつ白っぽくなりました。」
「私は眠くて、寝待月を見る前に、本当に寝てしまいました。朝、おかあさんに聞いたら、きれいに見えたわよと言うので、くやしくて、ないてしまいました。でも朝、家を出たら、まだ月が見えていました。今度はぜったいに夜に見てみたいです。」

子どもたちの「月への思い」が伝わってきますね！

昇る「寝待月」
地平線に近いので、肉眼ではもっと赤く見えます。どちらかといえば、「不気味な月」です。
東京都足立区で撮影

「校舎から見た寝待月」　昨夜は仕事が多く、学校に午後 10 時までいました。帰ろうとしたら美しい、東の空に美しい寝待月。あわててカメラを持ってきて撮影しました。本当は、「ビルの谷間」に昇ってきた月なのですが、月に露出を合わせると、ビルは暗すぎて写りません。

（お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋）